

熊本大学
学術資料調査研究推進室
(ハーン部門)

報告書

アラン・ローゼン

福澤 清

西川盛雄

2009

[目次]

○ 序説	1
第1章 背景：ラフカディオ・ハーンと第五高等学校	3
第2章 学術資料調査研究推進室ハーン部門の 背景と趣旨・目的	6
(1) 背景	6
(2) 趣旨・目的	7
第3章 組織と構成員	7
第4章 研究成果の公表と活用.....	8
(1) 学術論文.....	8
(2) 講演など.....	9
第5章 熊本大学設立60周年記念 (ハーン講演会とシンポジウム)	11
第6章 ハーン英作文添削のガラス乾板の判読、復元、日本語訳	13
第7章 地域貢献（ハーン顕彰事業）	14
第8章 他地域のハーン関連団体との連携	17
第9章 社会貢献	19
第10章 ハーン学術文献	20
○ まとめと今後の展望	21

[序説]

昨年4月に国立大学法人熊本大学に一つの研究拠点としての研究室が新たに開設された。これは熊本大学の学術資料調査研究推進室（Research Center for the Investigation of Academic Materials）のラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の研究部門である。この部門自体は制度的には既に10年前に開設されており、毎年附属図書館や五高記念館などにおいて研究成果の発表を行ってきたが、学術的な調査・研究の拠点となる具体的な場は今までなかった。この間日頃の研究成果を踏まえ、講演、公開講座、学際科目の講義担当、シンポジウム、展示会などさまざまな試みを通して熊本大学におけるハーン研究に関する知的財産が確実に積み上げられて来ている。

本研究推進室には「熊本大学が所蔵する古文書の分析・研究」、「水俣病関係学術資料の整理・収集」とともに「ハーン・コレクションの研究」の三研究部門があり、それぞれの学術資料の調査研究を行ってきている

この10年間、この研究推進室はハーンの持続的な顕彰と研究成果の発表を継続して行ってきた。平成12年（2000）から始めた過去9年間にわたる熊本大学公開講座「ハーンと漱石」は地域貢献を念頭に置いた研究成果の地域への還元であった。また、ハーン没後100年の2004年には熊本大学教職員有志の並々ならぬ協力に支えられてハーン顕彰のための大規模な催し（講演会とシンポジウム）と展示会の開催に貢献することができた。現在大学構内にあるハーン・レリーフはその時熊本大学の行事として前学長、当時の理事・副学長等出席の下、ハーン直系の子孫、ギリシャ大使、アイルランド大使、熊本県知事、熊本市長などをお招きして除幕されたものであった。

次にこの調査研究推進室ハーン部門の果たすべきテーマ（課題）としては次のようなものがあると思われるので列記しておきたい：

第1に大学内に散在するハーン関係の書籍・文献資料などを整理し「ハーン・コーナー」（仮称）を作り、これを全国的な視点でハーン研究の充実・発展に繋げること。

第2にハーン研究と顕彰の観点から国内のみならず国際貢献の視野をもってハーン関連団体や地域と繋がり、情報交換を行い、関係資料の調査研究やイベントの相互協力に努めること。

第3に地域貢献の立場から小泉八雲熊本旧居の維持・保存に関わり、熊本ア

イルランド協会や熊本八雲会などの催し（たとえば市民講座やハーン作品の読書会など）に積極的に参画・協力すること。

第4に大学のカリキュラム（各種授業形態）における教育活動に積極的に参画、協力すること。

第5に関係学会や研究会などに繋がって最新の情報を得ながら講演活動やトークなどを行い、日常の研究成果を還元すること。

第6に熊本大学における公開講座あるいは各種ハーン・イベントの企画を提案し、学内外の方々や次世代の若者に対してハーン顕彰を行っていくこと。

これらのことが直ちにスムーズに行くとは限らないが、研究推進室（ハーン部門）として漸次努力すべき事項として銘記しておかなければならない。

以上のことを踏まえて本部門が主としてこの一年間に行ってきたことの内容を整理・分類し、その結果をここに報告しておきたいと思う。

第1章 背景：ラフカディオ・ハーンと第五高等中学校

国立大学法人熊本大学の前身の一つは旧制第五高等中学校である。この学校は明治27年(1894)の高等学校令によって第五高等学校と名称を変えている。

第五高等中学校は明治維新以降日本の近代化を担うリーダーたちを養成するという機能をもって明治19年(1886)4月の中学校令公布に基づいて全国に五つ設立された高等中学校の一つであった。明治20年(1887)4月には京都以西、日本の西南地域である中国、四国、九州の地域をカバーするものとして、東北地方の第二高等中学校、北陸地方の第四高等中学校とともに五つの官制高等中学校の一つとして熊本に設置された。11月には予科3級24名、仮入学57名、合計81名に対して入学式を挙行し、まだ校舎も整わぬままに授業が開始されたのであった。同時に同年8月には医学部が長崎に設立されたことも記しておかねばならない。

明治22年(1889)8月に第五高等中学校本館の竣工があり、今に残る国重要文化財である赤レンガ本館が建造され、同年12月には化学実験場(階段教室)が竣工の運びとなった。そして明治23年(1890)10月10日には開校式を行っている。

第五高等中学校建学の草創期、初代校長は野村彦四郎、二代目は平山太郎であったが、当時文部省参事官であった嘉納治五郎が第三代校長として赴任し、就任三ヵ月後の明治24年(1891)11月9日には外国人教師ラフカディオ・ハーンを松江から招聘している。

ハーンは元々国籍はアイルランド系イギリス人であったが、アメリカ・シンシナティで8年間、ニューオーリンズで10年間、西インド諸島(マルティニーク島)で2年間、ジャーナリストとして活躍していた。特にニューオーリンズ時代に記者として取材した万国綿花博覧会の日本館に興味をもち、この時出会った内務省役人服部一三との出会いもあり、日本の文化や歴史・風土に深い興味をもつに至る。やがて記者としての手腕を買われニューオーリンズを去り、ニューヨークの『ハーパー・マガジン』社のルポルタージュ特派員として来日することになるのである。

ハーンは明治24年(1891)8月30日に松江を出発し、11月19日午後5時36分着の列車で熊本の春日駅(現熊本駅)に降り立った。時の嘉納治五郎校長自らハーン一行を駅に出迎えている。翌日の20日には第五高等中学校に出かけて校舎を見て廻っている。11月24日にはハーン就任式が行われ、その日から授業が始まったのである。はじめ構内にあった官舎を無料で貸与することになっていたが、用意された官舎は洋風ということでハーンは入居せず、

手取本町の赤星家の別邸を借りてここに住むことを選ぶ。そのとき自らの意思として買い入れた神棚は現在熊本市の小泉八雲熊本旧居の座敷内に引き継がれている。

ハーンは熊本滞在中以下の二箇所に居を構えた。そのうち第一旧居は元の位置から少しばかり移動され今日「小泉八雲熊本旧居」として熊本市の文化財課の管理下にある。第二旧居は現存していない。

① 熊本市手取本町 3 4

明治 24 年 (1891) 11 月 24 日 ~ 明治 25 年 (1892) 11 月下旬

② 熊本市坪井西堀端 3 5

明治 25 年 (1892) 11 月下旬 ~ 明治 27 年 (1894) 10 月 6 日

担当授業科目は英語、フランス語、ラテン語で週 27 時間の授業であった。これは一日 6 時間の授業時間で土・日以外の計 30 時間のほとんどの時間帯で授業していたことを意味している。これはハーンの前任者で初代の第五高等中学校英語教師、エヴァー・クラミーの後をそのまま引き継いだことによるものであった。

ハーンは松江では宍道湖、中の海、近くでは大山という美しい自然の風景のみならず、出雲大社など数々の日本神話にまつわる杵築の神社・古跡を訪ね、時の宮司千家尊紀と出会い、社内に昇殿を許されたはじめての外国人となっている。この地の数々の古跡との出会いはハーンの心を和ませ、日本という国に対して深い親和的な共感を持って入り込む事になる。ここで出会った士族の娘、小泉節との結婚は後のハーンの生涯に大きな意味をもつことになる。

一年余りの松江滞在の後、ハーンは家族、車引、お手伝いさんまでも伴って熊本に赴任する。しかし旧都の古来からの日本的雰囲気を残す松江と新都の近代的な町作りに積極的な熊本との間には大きなギャップがあった。同じ日本にあってハーンはこのギャップに大きな戸惑いを経験する。その頃、熊本の町は日本史上最後の市民戦争 (Civil War) であった西南戦争後、町中は大いに荒廃し、歴史を伝える神社・仏閣や町並みも変質し、多くの伝統的なものが消失していた。ここにハーンは松江と比較して熊本に対する評価の揺らぎを経験し、このことを書簡などを通して B. H. チェンバレンなどの親しい友人に書き記すことになるのである。

当時の日本の明治新政府は日本が西洋の植民地にならぬよう富国強兵、殖産興業の近代化・西洋化の路線を推し進めていた。いきおいアジアにあって脱亜の思想においてヨーロッパをモデルとした国造りに邁進していたのである。ハ

ーンがやってきた熊本の町は当時軍都として近代的な町に変貌を遂げようとしていた。これはハーンにとっては喜ぶべきことではなかった。ハーンは自らの出自である西洋列強をモデルとして進む日本の近代化の行く末が必ずしも人間を幸福にするとは限らないことを知っていたからであった。

ハーンは熊本では松江と違って高等中学校の生徒に相對していたことから給料もはね上がって月給は200円であった。(松江では100円。)当時の英語科の主任は佐久間信恭であった。佐久間は札幌農学校でウィリアム・クラーク先生の実学的・宗教的薫陶を受けた近代主義あるいは個人主義の傾向を強くもつ教師であった。学校の同僚としてはハーンにとっては嘉納治五郎と秋月胤永は親しみのもてる特別な存在であった。この二人の日本人は明治維新以降の新しい日本が近代化・西洋化する以前からの日本古来の精神的な伝統を大切に守ろうとする存在であったからである。

第五高等中学校を舞台としたハーン作品としては「九州の学生とともに」「柔術」「石仏」がある。前二つの作品は構内にあった修養のための瑞邦館や授業の様子、「石仏」は校舎の後ろに位置する立田山の麓の小峰墓地の一面にある江戸時代から鎮座し、実際に現在も存在する石仏がモチーフになっている。さらに明治27年(1894)はじめに行った有名な講演『極東の将来』では、熊本は九州気質で華美贅沢を避け、「善良、質朴、簡素」の精神を特質としていることに共感し、将来の日本の若者がこの心がけでもって国の将来を担うべきことを主旨としてこの講演を締めくくっている。

熊本の地を舞台にして創られた作品には名作と言われる「夏の日の夢」「停車場で」「橋の上」「生と死の断片」「願望成就」がある。授業はすべて英語で行う直接法(Direct Method)で、授業中は明快な発音でゆっくりと話し、英作文の時間には自由英作文を書かせ、これに内容のコメントや英語の訂正を加えて生徒の語学力向上を図った。当時の試験問題の一部が本学構内の五高記念館に残っているが、それは19世紀イギリスの卓越した知識人カーライルの読書論に関わって理想主義的な内容に関するもので程度の高いものであった。

ハーンは熊本の後2年間神戸でアメリカ時代の経験を生かして『神戸クロニクル』の新聞記者として記事を書く仕事に携わっていたが目を悪くし、その後帝国大学文科大学の外山正一学長に請われて帝国大学に赴任し、英文学を講義することになる。大学でのハーンの授業は明快で学生に寄り添った姿勢を貫いて人気は高かった。しかし、やがて高等教育とお雇い外国人に関する国の政策変更により井上哲次郎の学長時に突如帝国大学を解雇されることになる。その時早稲田大学草創期にあった坪内逍遙や高田早苗らの努力によってハーンは早稲田大学に行く事になる。そしてその約半年後にハーンは突然の心臓発作によ

って生涯を終えることになるのである。

この帝国大学をハーンが解雇された後に赴任してきたのがロンドン留学から帰国したばかりの夏目漱石であった。奇しくもこの二人の文豪はすでにここ第五高等（中）学校においても相前後して赴任して来たという奇蹟的なめぐり合わせをもっていたことは興味深いことであった。

第2章 学術資料調査研究推進室ハーン部門の背景と趣旨・目的

学術資料調査研究推進室ハーン部門の趣旨・目的は熊本大学の立場においてかつて五高の英語教師であり、文豪といわれるラフカディオ・ハーンの研究と顕彰である。その社会的役割はハーンが本学と極めて深い関係にあり、しかも今日に至るまでハーンはよく知られる存在であるがゆえに、熊本大学の果たすべき社会的・歴史的そして学術的責任はすこぶる大きいといわなければならない。

（1）背景

大学を取り巻く状況は近年ますます厳しくなっている。果たすべき大学の歴史的・社会的責任は大きくなり、国立大学法人熊本大学においてもその研究と教育の質と量において国際貢献と地域貢献の視点からその真価が問われる。それは即大学評価に反映されてくる性質のものである。

本学の歴史は、医学部に関しては古くは江戸時代細川藩の再春館に繋がるが、工学部は工業高等専門学校、薬学部は薬学専門学校、教育学部は高等師範学校に繋がるが、理学部、法学部、文学部は第五高等中学校（明治27年以後は第五高等学校）に繋がりその存在は国重要文化財・五高記念館や通称赤門の存在と相俟ってきわめて大きい。この第五高等中学校の草創期の明治24年(1891)11月に時の校長嘉納治五郎の招聘により松江から熊本に赴任してきたのがお雇外国人教師ラフカディオ・ハーンであった。

既にハーン研究については本学においては熊本大学小泉八雲研究会が組織されてきており、数々の研究成果を世に出し、顕彰のための催しも学内外で行われてきた。1993年に『ラフカディオ・ハーン再考＝百年後の熊本から＝』（恒文社）、1999年に『続ラフカディオ・ハーン再考＝熊本ゆかりの作品を中心に＝』（恒文社）を上梓した。2000年2月にはこれらの業績により熊日出版文化賞が授与されている。この流れの中で本調査研究推進室ハーン部門が熊本大学に設けられた。2005年にはその前年（2004年）のハーン没後百年

の催しを機に熊本大学のハーン研究者を中心に『ラフカディオ・ハーン＝近代化と異文化理解の諸相＝』（九州大学出版会）を上梓し、従来の継続的なハーンの顕彰と研究の成果を公表した。

（2）趣旨・目的

国立大学法人熊本大学は旧制五高時代に優れた文人かつ教育者であったラフカディオ・ハーン（小泉八雲）をもっていた。この人物の研究と顕彰は熊本大学の果たすべき社会的責務の一つである。本研究推進室ハーン部門の趣旨・目的は学内にあってはハーン研究と顕彰を進めこれを教育に反映し、学外に向かって社会貢献を果たすことにある。

まず何よりもハーンは熊本を舞台とした優れた作品を多く書き残している。中でも旧制五高を舞台にした作品も多く、彼の熊本時代の姿を今に伝えてくれている。さらに熊本を舞台にした作品にも名作と言われているものが多い。

研究推進室ハーン部門の役割は、熊本大学が熊本という地域に位置し、ハーン自身がこの地に約三年間第五高等中学校の教壇に立ち、なおかつこの地を舞台にした作品を多く残してくれている以上、本研究推進室ハーン部門の責務としてハーン研究をさらに深化させ、その結果を世に公表していくことである。

次に五高記念館あるいは附属図書館には貴重なハーン関係の資料・文献が多く存在している。そこにはハーンがエッセーを執筆している *Atlantic Monthly* やまた新聞記者としてハーンがアメリカで主として *Cincinnati Inquiry*, *Cincinnati Commercial* 紙に載せた記事などが含まれている。いずれも今では入手困難な文献である。これらを少しでも活用することによってハーン研究を進めていくことが求められている。

第3章 組織と構成員

構成員は当初4名であったが後に一人が他校に異動になったため現在の構成員は以下の三名である。

- アラン・ローゼン （教育学部・英語教育専修教授）
- 福澤 清 （文学部・超越言語文学科教授）
- 西川盛雄 （熊本大学名誉教授、客員教授）

なおアラン・ローゼン研究員は教育学部、福澤清研究員は文学部でそれぞれ

現役スタッフとして通常勤務を果たしている。構成員の一人は平成21年3月末日に熊本大学を定年退職後、新たに特定事業研究員として現在本研究推進室の構成員としての責務を果たしている。

なお将来の本研究推進室の充実を期するならば、信頼性が高く妥当な研究者を構成員を新たに加え、ハーン研究の全国的な研究拠点としての位置を確かなものにし、将来的な充実・発展を図ることが望まれる。

第4章 研究成果の公表と活用

本研究推進室ハーン部門の構成員は日頃の研究成果の公表・発表を学術論文として継続的に行ってきた。その積み上げとして今日熊本大学はハーン研究の全国的な研究拠点の一つとして認知されるつつある。以下に最近の「学術論文」（過去5年分）と「講演など」（過去2年分）について記しておきたい。

（1）学術論文

アラン・ローゼン：

- > 「ハーンとフィラデルフィア」（徳永紀美子訳）
『ラフカディオ・ハーン＝近代化と異文化理解の諸相＝』 西川盛雄編著
九州大学出版会 2005年7月発行 pp. 25-36
- > 「ラフカディオ・ハーンの科学論説 I 自然科学」
『ハーン曼荼羅』 西川盛雄編著
北星堂 2008年6月発刊
- > 「ラフカディオ・ハーンの科学論説 II 生命科学」
『ハーン曼荼羅』 西川盛雄編著
北星堂 2008年6月発刊
- > 「"Teaching Lafcadio Hearn in the United States"」
『へるん』46号 pp. 60-64
八雲会発行 2009年6月

福澤 清：

- > 「異文化受容と言語政策史の一断面＝ハーンの「日本教育政策」を中心に＝」
『ラフカディオ・ハーン＝近代化と異文化理解の諸相＝』 西川盛雄編著

- 九州大学出版会 2005年7月 pp. 49-66
- > 「ハーンにおけるナショナリズム」
『現代に生きるラフカディオ・ハーン』 田中雄次、福澤清編
熊本出版文化会館 2007年3月 pp. 53-72
 - > 「ハーン再評価の試み」
『現代に生きるラフカディオ・ハーン』 田中雄次、福澤清編
熊本出版文化会館 2007年3月 pp. 73-93
 - > 「漱石とハーンにおける「超自然性」」
『漱石と世界文学』 坂元昌樹・田中雄次・西槇偉・福澤清編
思文閣出版 2009年3月 pp.176-204
 - > 「ラフカディオ・ハーンとブラム・ストーカー」
『講座八雲講座 II=ハーンの文学世界=』
平川祐弘・牧野陽子編 新曜社 2009年11月 pp.274-288

西川盛雄：

- > 「ガラス乾板によるハーン添削の英作文の紹介と分析」
『ラフカディオ・ハーン=近代化と異文化理解の諸相=』
西川盛雄編著 九州大学出版会 2005年7月発行 pp.149-167
- > 「ハーンは言語をどう捉えていたか」
『ハーン曼荼羅』 西川盛雄編著
北星堂 2008年6月 pp. 159-175
- > 「英語教師ハーンのスタンス」
『ハーン曼荼羅』 西川盛雄編著
北星堂 2008年6月 pp. 139-157
- > 「アメリカ時代のラフカディオ・ハーン」 『へるん』第46号
八雲会発行 2009年6月 pp. 5-13
- > 「ハーンと漱石の試験問題」 『方位』第27号
熊本近代文学研究会編集発行 2009年11月 pp. 1-14
- > 「ゴンボ・ゼーブの三層構造」
『八雲講座 II』 牧野陽子編、平川祐弘監修
新曜社 2009年12月発刊 pp. 214-232

(2) 講演など

アラン・ローゼン

- ・ 「ハーンの猫関係作品をよむこと」
八雲会ハーン作品の読書会（2008年10月26日）
- ・ 「アメリカの大学でハーンを教えること」
熊本アイルランド協会市民講座（2008年11月8日）
- ・ 「ハーンが書いたアメリカ時代の科学記事」
熊本大学附属図書館学術資料調査研究推進室（2008年12月11日）
- ・ 「早稲田大学におけるハーンの晩年」
小泉八雲熊本旧居保存会・八雲忌講演会（2009年9月26日）
- ・ 「ハーンが書かなかった作品」
熊本アイルランド協会市民講座（2009年10月10日）
- ・ 「ラフカディオ・ハーンとアイルランド文化」
八雲会ハーン作品の読書会（2009年10月25日）
- ・ 「ハーンのニューヨークとフィラデルフィア時代」
熊本大学設立60周年記念シンポジウム（2009年11月7日）

福澤 清

- ・ 「ラフカディオ・ハーンの超自然」
熊本アイルランド協会市民講座（2008年6月29日）
- ・ 「ハーンと芥川龍之介」
八雲会ハーン作品の読書会（2009年8月23日）
- ・ 「ラフカディオ・ハーンのシンシナティ時代」
熊本大学設立60周年記念シンポジウム（2009年11月7日）
- ・ 「世界文学の水脈をめぐってーハーンと漱石ー」
熊本大学小泉八雲研究会（2010年3月30日）

西川盛雄

- ・ 「ハーンの魅力」
放送大学熊本学習センター公開講演（2008年5月18日）
- ・ 「ハーンと漱石」（5回、毎土曜日）
熊本大学公開講座（2008年6月14, 21, 28, 7月5, 12日）
- ・ 「ラフカディオ・ハーンのアメリカ時代」
松江市開府四百年記念シンポジウム基調講演（2008年10月25日）
- ・ 「アイルランドの風土・歴史・文化・言語」
熊本大学英文学会シンポジウム（2008年11月29日）

- ・ 「五高時代のハーンと漱石の試験問題」
五高記念館友の会総会（2009年5月16日）
- ・ 「ハーンと漱石の熊本時代」
放送大学熊本学習センター公開講演会（2009年6月14日）
- ・ 「ジェーンズのその後＝ノートフェルファーの研究＝」
ジェーンズ先生没後百年記念連続講座・第五回（2009年8月22日）
- ・ 「ラフカディオ・ハーンの最晩年」
小泉八雲熊本旧居保存会・八雲忌講演会（2009年9月26日）
- ・ 「ハーンと熊本」
熊本大学公開講座（『明治の文豪たち』）（2009年10月31日）
- ・ 「ラフカディオ・ハーンのニューオーリンズ・マルティニーク時代」
熊本大学設立60周年記念シンポジウム（2009年11月7日）
- ・ 「ラフカディオ・ハーンと移民」
熊本アイランド協会市民講座（2009年11月14日）
- ・ 「ハーン家の人々」
八雲会ハーン作品の読書会（2009年12月19日）

第5章 熊本大学設立60周年記念（ハーン講演会とシンポジウム）

平成21年（2009）11月7日（土）（14:00～17:00）に熊本大学構内のくすの木会館・レセプション・ルームにおいてハーン講演会とシンポジウムの催しを企画・実行した。主催は熊本大学附属図書館・学術資料調査研究推進室であった。記念となる催しの主旨は以下の三点であった。

- （1）熊本大学設立60周年記念
- （2）熊本大学学術資料調査研究推進室開設10周年記念
- （3）ラフカディオ・ハーンアメリカ移住140周年記念

特に本年はハーンが明治2年（1869）にヨーロッパ（イングランドのリヴァプール）からアメリカにアイランド移民船に乗って渡米してから丁度140年目の記念すべき年に当たることから全体のタイトルを

ラフカディオ・ハーン漂泊の軌跡
＝ヨーロッパからアメリカへ＝

とした。渡米後ハーンはオハイオ州のシンシナティに8年、ルイジアナ州のニューオーリンズに10年滞在して有能なジャーナリストとしての実績を積むにいたる。このことがニューヨークの大手出版社ハーパー社の目に留まり、特に依頼を受けてフランス領西インド諸島のマルティニーク島に約2年間滞在・取材した。そしてその実績が認められて同じハーパー社から当時のアジアの新興国日本の取材を新たに依頼され、明治33年（1890）4月、ルポルタージュ作家として来日することになるのである。

基調講演はハーンの次男小泉巖（養子となって稲垣巖）の長男であられる稲垣明男氏にお願いした。稲垣氏はハーン令孫に当たられる方で、今回の熊本大学の特別企画事業の基調講演者としてふさわしい方であると判断したからである。氏は2009年にギリシャのキシラ島にあるハーンの実母ローザ・アントニオ・カシマチの墓碑とその子孫を訪ねられたが講演内容はその時に見聞きしたもの、出会った人々についての貴重な話であった。また同時にハーンが生前最後まで部屋に架けて眺めていたという貴重な「木の精」の掛け軸を持参して下さり、これを講演の中で披露して下さった。講演タイトルは

ヨーロッパ時代のハーン

＝ハーン実母の墓標とその子孫を訪ねて＝

であった。講演者紹介は熊本八雲会々長中村青史氏が行った。

来場者は約100人。会場（熊本大学構内のくすの木会館）はいっぱいになった。谷口功学長には冒頭挨拶をいただき、講演会、シンポジウムを通して参加していただいた。入口紀男図書館長からは主催者側の挨拶をしていただき、総合の司会進行は附属図書館の永田正次情報図書課長が行った。谷口学長には懇親会の最後まで居ていただくことができ、幸いなことであった。

シンポジウムは基調講演がヨーロッパ時代のハーンに焦点を当てたものに対してアメリカ時代のハーンに焦点を当てたものであった。ハーンのアメリカ滞在を三つの時期に分けて、①シンシナティ時代、②ニューオーリンズ・マルティニーク時代、③ニューヨーク・フィラデルフィア時代としてパネリスト各人がそれぞれの地域を担当した。パネリストは本推進室の構成員アラン・ローゼン、福澤清、西川盛雄の三名が担当した。これは日頃の研究成果の公表という一面をもっていた。コーディネイターは小泉八雲熊本旧居保存会々長中島最吉氏にお願いした。各パネリストのタイトルは以下の通りであった。

- ・福澤 清 (文学部教授)
テーマ：「ハーンのシンシナティ時代」
- ・西川盛雄 (熊本大学客員教授・名誉教授)
テーマ：「ハーンのニューオーリンズ・マルティニーク時代」
- ・アラン・ローゼン (熊本大学教授)
テーマ：「ハーンのニューヨーク、フィラデルフィア時代」

第6章 ハーン英作文添削のガラス乾板の判読、復元、日本語訳

平成18年(2006)年6月、熊本県立図書館においてハーンが松江時代に島根県尋常中学校(旧制松江中学)において英作文の時間に生徒に書かせた英作文のハーン自身による添削がガラス乾板のかたちで見つかった。これは五高出身の劇作家木下順二氏が東京大学文学部英文科に保管されてあったものを戦後木下氏の郷里である熊本の小泉八雲旧居に送付しておいたものであった。これが保存され、何らかの理由で熊本県立図書館に移され、ここで見つかったのである。(したがってこのガラス乾板の所有権は熊本県立図書館に属している。)

ハーン先生から英語の添削を受け、それを現在に残している生徒の名前は大谷正信と田辺勝太郎である。大谷は後に帝国大学に進み再びハーンの授業を受け、卒業後は英文学者として第四高等学校教授を経て広島高等師範学校で教鞭を取ることになる。また大谷は同時に『ホトトギス』系の俳人でもあった。田辺は後に帝国大学に進み、秋田県を振り出しに足尾銅山など採鉱・採掘などの鉱山学で全国にその名を知られる人材となっている。

この二人の生徒の添削分95枚のガラス乾板が残されていたが、本推進室ハーン部門メンバーの一人にこのガラス乾板の<判読><復元><日本語訳>の作業を熊本県立図書館から依頼された。その資料的価値の大きさに鑑みて平成18年度科学研究費補助金に応募して採用された(基盤研究(C) 課題番号18520438)。これを受けてさらにこの作業をより確実なものとするために本推進室のスタッフの一人であるネイティヴ・スピーカーであるアラン・ローゼン氏の協力のもとにこの作業を終わらせる事ができた。この内容についてはすでに一部論文として発表したりハーン講演会などで紹介してきている。

このガラス乾板の判読・公開の意義は教育者ハーンの実像にせまる貴重な原資料になるということである。松江では旧制の中学校、熊本では高等学校で英語を教えたハーンではあったがその授業風景は具体的な形としてはわかりにくいくところがあった。しかしこのハーン自らの手による生徒の英作文の添削につ

いての資料はハーンの教育者としてのリアルなスタンスとその力量を示唆してくれる。これはハーンの松江時代のものであるがゆえに松江在住のハーンの直系曾孫に当たられる小泉凡先生（島根県立大学）に依頼して序文をいただくことができた。この研究成果は冊子として近く公表される予定であるが、本推進室ハーン部門の仕事としてこれを提示し、今後学術的にもこれを活用していきたいと思っている。

第7章 地域貢献（ハーン顕彰事業）

ラフカディオ・ハーンが書いた再話作品や書簡や新聞記事は現代にも通じる語句（アフォリズム）に満ちている。ハーンはギリシャ人でキシラ島出身の母をもち、この母に繋がるギリシャの自然や神話を大切に思っていた。父親はアイルランド系イギリス人軍医であったが父親の理不尽な振舞いが原因で両親は離婚。かくしてハーンは不幸な幼少青年期をヨーロッパで送り、その後移民船に乗ってアメリカに渡り、やがて有能なジャーナリストとしてアメリカ（シンシナティ、ニューオーリンズ）と西印度諸島のマルティニーク島で活躍していくことになる。

シンシナティ時代はアメリカの南北戦争後の急激な近代化に由って来る人種問題や社会の底辺にある不条理な闇の世界をテーマにしたセンセーショナルな記事を書き、ニューオーリンズ時代はクレオールに代表されるような文化の接触・混淆・変容にみられる複雑な民俗学的な視点をテーマにした記事や作品（小説）を書いた。またフローベールやゴーチェなど当時のフランスの文学思潮を代表する作家たちの作品を精力的に英語に翻訳していた。

その後、フランス領西印度諸島のマルティニークでのルポルタージュ作家としての滞在を経て来日するが、日本では神道、仏教という非西洋の宗教に出会い、セツ夫人などから聞いた日本の怪異な民話、説話を再話し、やがて最晩年には『怪談』や『骨董』に見られるような文学作品を多く世に残す。ハーンの身は西洋から東洋（日本）に来たが、彼の作品従って言葉と心は東洋（日本）から西洋に送り届けられた。それは地理的にはハーンの東洋から西洋に向かって発するメッセージであったのと同時に西洋化・近代化に突き進む日本（人）に対する警告のメッセージでもあった。

没後百年以上を経ているながらも今もなお語り継がれるハーン作品の現代性は近代化の結果としてたどり着いた現代社会の危うさを示唆している。たとえば、怪談「青柳ものがたり」では樹（青柳）を切り倒す人間の無神経さがこの樹の

樹霊（いのち）を断ち切ってしまうことに繋がることを述べ、自然を無神経に切り倒していく人間は一本の木にも尊い霊（いのち）があり、これを理不尽に切り倒してはならないことをメッセージとして伝えている。ここに現代の環境問題に通じる警句が示唆されている。ここにハーン作品の現代性を垣間見ることができる。

大学が社会から孤立して活動することは既に時代にそぐわない。現下大学が大いに国際貢献・社会貢献を果たしていくことが要求されている。本研究推進室のハーン顕彰事業はハーンの生涯と作品を研究することによってその現代性、あるいは未来への暗示性を理解することが必要である。ここでは熊本という地であって繋がっている各種ハーン関係の組織、団体などに触れ、本研究推進室ハーン部門との相互の関連を記しておきたい。

（１）小泉八雲熊本旧居保存会

小泉八雲熊本旧居保存会は熊本市の文化財課が管轄している。その目的は小泉八雲熊本旧居（熊本市安政町）の保存と文化の振興に当たることである。またこの保存会には熊本大学と縁の深いハーンを顕彰するという目的もあり、理事会において旧居の維持運営が図られている。事業としては旧居来館者への案内・説明を行うことであるが、毎年ハーン命日（９月２６日）の日には一般市民を対象としたハーン作品の朗読会を行っている。また、この９月に合わせて発行する『ハーン通信』は平成２１年度で第１６号を数えて全国に配布されている。本研究推進室ハーン部門の一人はこの保存会の理事の一人としてこの保存会に関わり、熊本の文化財保存の一端を担っている。

（２）熊本八雲会

熊本八雲会は小泉八雲顕彰のために熊本アイランド協会から分岐し、独立して設立された熊本のハーン顕彰を志す市民のグループである。全国的には同種の会は松江市、富山市、焼津市にあり、それぞれ固有のハーンとの関わりにおける歴史がありそれぞれに機関誌を発行し、互いの情報交換を行ってきている。特に松江八雲会は戦前から存在し、歴史も古く、学術雑誌『へるん』を毎年発行してきている。熊本大学の本推進室ハーン部門の構成員もすでに複数回論文寄稿を行ってきている。

熊本八雲会の事務局は南風堂（熊本市北千反畑町）内にあり毎年一度の総会が開かれている。機関誌『石仏』は年一度発行され、熊本におけるハーン顕彰に一定の役割を果たしている。恒常的な企画としては毎月一度一般市民向きの「ハーン作品の読書会」を小泉八雲熊本旧居で行っているが、これは本年三月

には33回を数えている。この読書会のトークには本研究推進室のメンバー全員が積極的に関与・貢献してきている。なお、本推進室の一人はこの熊本八雲会の副会長を務めている。

(3) 熊本アイルランド協会

ハーンの父親はアイルランド系イギリス人であった。ハーンは生地であるギリシャのレフカダを2歳で母親と共に父親の実家のあったダブリンに赴き、この地に13歳まで滞在していた。このハーンがアイルランドに深い関係があることにちなんで熊本でアイルランド協会が設立され機関誌も年一度発行されている。その中心にハーンの顕彰が位置づけられている。上記熊本八雲会はこの熊本アイルランド協会から分かれて八雲顕彰に特化したものである。この協会はその性格上アイルランド大使館との繋がりも深い。

本研究推進室ハーン部門の一人はこの協会の理事であり、同趣旨でできている松江アイルランド協会（代表はハーン曾孫小泉凡氏）とも密接な協力関係を保っている。熊本大学のハーン研究と顕彰の観点から熊本アイルランド協会との協力関係は今後も大切なものの一つである。

(4) 五高記念館友の会

熊本大学には University Museum 構想にもとづく五高記念館があり、その運営委員会が学内的にあるが、もうひとつ学外組織として「五高記念館友の会」がある。これは第五高等（中）学校のことに関わって多角的に五高記念館を側面から支援していこうとするものである。事務局は五高記念館内に置かれ、機関誌『赤煉瓦通信』を第7号まで発行している。ここでは五高同窓会に繋がり、広く五高に関わる先人たちを顕彰し、これを継承する会であるが、その先人たちの一人、ラフカディオ・ハーンについての顕彰も考慮されている。本研究推進室ハーン部門の一人はこの「五高記念館友の会」の世話人の一人として、同友の会の運営に携わっている。

(5) 熊本近代文学館友の会

熊本県立図書館に併設されている熊本近代文学館は熊本所縁の近代の小説家、詩歌人、劇作家など多様な文学者たちを扱っている。ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）もこの文学館に展示されている重要な作家の一人である。この文学館には会員制の「友の会」があり、機関誌を発行して多様な文学者たちの理解を深め、その顕彰企画を通して会員相互の交流を深めている。

本推進室ハーン部門も近代文学館の企画への貢献を惜しまず協力し、情報提

供を行ったりしてきている。また本推進室ハーン部門の企画へのサポートをお願いしている。平成21年度11月の熊本大学設立60周年記念の講演会、シンポジウムにおいても後援をいただいた。

第8章 他地域のハーン関連団体との連携

本推進室（ハーン部門）は恒常的に各地のハーン関連団体との連携を堅持し、これを深めている。熊本という地を越えたハーン研究ネットワークの必要性を痛感しているからである。ここに本推進室ハーン部門とハーン顕彰においてそれぞれに顕著な役割を果たしている主な四つの関連地域（松江、富山、焼津、シンシナティ）との関係について以下に記しておきたい。

（1）松江（島根大学、松江八雲会、松江市立図書館）

松江には島根大学小泉八雲研究会、松江八雲会、島根県アイランド協会があり、市の文化・教育・観光レベルでのハーン顕彰活動は活発である。特にハーン曾孫の小泉凡氏（島根県立大学）が居住されており、松江のハーン顕彰活動の顧問格としての存在は大きく、その活動には歴史と豊かな実績がある。

熊本大学もこの小泉凡氏との関係は深く、これまでも幾度か足を運んで本学で講演をしていただいております、平成16年（2004）年9月のハーン没後100年記念のハーン・レリーフ除幕式に際しては基調講演を行っていただいた。

熊本大学の松江との関係で特筆すべきことは、本学附属図書館は金原理元館長の時に本学研究推進室のメンバーも参加してハーンの国内外のハーン研究の総合文献目録の作成の仕事に携わったことがあった。これは本学附属図書館に加えて島根大学附属図書館と富山大学附属図書館三者による総合的な研究体制を組織し、松江（島根大学）の故銭本健二教授を中心に科学研究補助金を獲得して成ったものであった。このハーン総合文献目録は膨大なものであるが現在も貴重かつ便利な資料として関係者に活用されている。

松江市立図書館には「ハーン・ルーム」が常設されており、松江時代のハーンに関わる文献・資料もよく保存され、同時にハーン関係の貴重書もよく整理されている。館内の一室には松江の『八雲会』事務局が入り、文献・資料の管理を行っており、雑誌『へるん』を発行している。ハーン研究資料の参照のためにここを訪れる人は多い。

平成20年（2008）年度、松江で松江開府400年祭記念の一環として行われた講演会で『アメリカのラフカディオ』というメイン・テーマの下で本研究

推進室の一人が「アメリカ時代のラフカディオ・ハーン」というテーマで基調講演を行った。

(2) 富山（富山大学附属図書館、 富山八雲会）

富山大学附属図書館にはハーンが生前持っていた蔵書の全てがそっくり『ヘルン文庫』として大切に保管されている。またこの地には『富山八雲会』が存在し、富山大学、富山国際大学などを中心としたハーン研究と顕彰グループがあり、機関誌『へるん倶楽部』を毎年富山八雲会を事務局として発刊してきている。

熊本大学附属図書館は上述のように富山大学附属図書館、島根大学附属図書館と連携して広い視野をもった『ハーン総合文献目録』の作成を共同で行ったという実績をもっている。

『ヘルン文庫』はかつてハーンの弟子であり、富山出身でよくハーン家に入りしていた田部隆治が関東大震災に際してハーン未亡人の節夫人からハーン蔵書の処遇の相談を受け、田部が当時旧制富山高校の英文学教授であった兄の南日恒太郎に相談、その時北前船で財を築き、富山の資産家であった馬場ハルの金銭的尽力によって旧制富山高校に行くことになったのである。

この『ヘルン文庫』にあるハーン蔵書には多くのハーンの手書きの書き込みが多く遺され、貴重なハーン研究の基礎資料となっている。熊本からも本推進室のメンバーはこの『ヘルン文庫』を訪れ、同時に富山八雲会との交流を今日まで大切に継続してきている。

(3) 焼津（小泉八雲記念館）

ハーンが帝国大学文科大学講師として英文学を教えていた時、夏休み休暇中ハーン一家は焼津に6回訪れ、山口乙吉宅に逗留している。その間「漂流」「焼津にて」などいくつかの焼津を舞台とした作品を遺している。この家は今は犬山市の明治村に移築・保存されている。

この焼津の小泉八雲顕彰会の顧問を務めておられる稲垣明男氏はハーンの次男（小泉巖）の長男、つまり令孫である。本推進室では2003年と昨年（2009年）と二回にわたって熊本大学にお呼びして講演をいただいている方である。昨年11月7日の熊本大学設立60周年記念、学術資料調査研究推進室設立10周年記念、ハーンのアメリカ移民140周年の記念シンポジウムに基調講演をしていただいたことは記憶に新しい。

(4) シンシナティ (アメリカ・ハーン協会)

シンシナティはハーンが8年間新聞記者として滞在していた都市である。ここで19歳でアイルランドの移民船に乗って渡米した若き日のハーンは印刷屋のヘンリー・ワトソンに拾われ、『シンシナティ・インクワイアラー』紙、『シンシナティ・コマーシャル』紙の記者として活躍する。マティーという混血の女性と最初の結婚をするのもこの町であった。

この地に全米ハーン協会の副会長、田中欣二博士がおられる。アメリカでハーンに関わる資料や発表に関する情報を提供して下さり、互いの情報交換を密にしている。本推進室ハーン部門のスタッフがシンシナティを訪問時、シンシナティ公設図書館の文献調査、シンシナティ大学附属図書館の貴重図書室や資料の閲覧など大いにお世話になった。

第9章 社会貢献

本推進室(ハーン部門)のスタッフはささやかではあるが地域のハーン関係の協会や研究会の団体などに対して恒常的に以下のようなかたちで貢献を行っている：

- ① 講演会や市民講座において講師を務める。
- ② 新聞や機関誌、会報などに書評やエッセーなどを寄稿する。
- ③ 研究会などで資料紹介を行い、研究報告を行う。

以下に本推進室ハーン部門の貢献について記しておきたい。

アラン・ローゼン：

- ・熊本アイルランド協会市民講座講師
- ・熊本大学学際科目『五高と近代日本』講師
- ・熊本八雲会主催の読書会講師

福澤 清：

- ・熊本大学小泉八雲研究会代表世話人
- ・熊本アイルランド協会市民講座講師
- ・熊本八雲会主催の読書会講師

西川盛雄：

- ・小泉八雲熊本旧居保存会理事
- ・熊本アイランド協会理事
- ・熊本八雲会副会長
- ・熊本漱石倶楽部世話人
- ・熊本市立図書館協議会々長
- ・五高記念館友の会世話人

第10章 ハーン学術文献

熊本大学にはハーンに関する一般的文献は附属図書館2階の文学のコーナーに配架されているが、文学部、教育学部、大学教育センター既習外国語図書室などに散在している。前者の場合は学内スタッフや学生が自由に閲覧・活用することは可能であるが、後者の場合は関係学科の図書室または関係教員の研究室にあって自由に借り出すことはできない。

学長裁量経費によって購入したラフカディオ・ハーン関係文献・資料は熊本大学が全国的なハーン研究の拠点となるべく、五高記念館に「ハーン・ルーム」を創出するために入手したものであった。しかし現実的には五高記念館で「ハーン・ルーム」を創出することが困難であるということで平成22年（2010）3月、このハーン関係文献・資料は附属図書館に移動し、貴重図書としての扱いにおいて保管することになった。このことによってハーン研究に関心のある学内外の研究者や学生の便宜に資することができるようになる。その結果として熊本大学のハーン研究における利便性が高まると思われる。

このハーン文献・資料の中にはハーン手書きの草稿を記すヴァージニア大学所蔵の「バレット文庫」の写し、アメリカ時代の記者としてのハーンの手記が記載されている *Harper's Magazine*, *Atlantic Monthly*, ハーンの手記、Houton Mifflin 社のハーン出版物などハーン研究にとって貴重なものも含まれている。以下はその主な文献・資料のリストの一部である。（イタリック体は書名である。）

- ・ *Harper's Magazine* 6冊セット
- ・ *Atlantic Monthly* 19冊セット
- ・ *Historical Sketch Book and Guide to New Orleans and Environments with Map*

- *Three Popular Ballads*
- *Clarimonds*
- Chamberlain and Mason: *Handbook for Travellers in Japan*
- Yone Noguchi: *Lafcadio Hearn*
- *Insects and Greek Poetry*
- Hirakawa Sukehiro: *Rediscovering Lafcadio Hearn*
- *The Japanese Letters of Lafcadio Hearn* (Edited by E. Bisland)
- *Stories from Pierre Loti*
- *Stories from Emile Zola*
- *Lafcadio Hearn's American Articles: Oriental Articles*
- *Lafcadio Hearn's American Articles: Literary Essays*
- *Lafcadio Hearn's Letters I, II*
- Kazuo Koizumi: *Father and I =Memories of Lafcadio Hearn=*
- *A History of English Literature*
- Frederick Starr: *Investing New Orleans*

[まとめと今後の展望]

現下、国立大学法人熊本大学の置かれている状況は厳しいものがあるが、大学の研究と教育の進化と深化については状況いかに関わらずこれに努めていかなければならない。本報告書は熊本大学附属図書館・学術資料調査研究推進室ハーン部門の2009年度における報告書であった。

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の顕彰と研究は熊本大学にあって極めて重要なものである。ハーンは文学者としては文豪として我々によく知られた文人であったからだけではなく、教育者としては旧制第五高等（中）学校（現熊本大学）の英語教師として実際に五高記念館の教壇に立つ優れた教育者であったからである。

本推進室ハーン部門は制度的には附属図書館内に10年前に開設されており、毎年附属図書館などで研究成果の発表を行ってきたが、これまで学術的な調査・研究の拠点となる具体的な場は特になかった。しかしこれまでの研究成果を踏まえ、講演、公開講座、学際科目の講義への貢献、シンポジウム、展示会の開催などさまざまな試みを継続的に行ってきた。

本推進室ハーン部門の目標・役割との関係で、五高記念館に保管されていたハーンに関する学術書や資料を2010年3月に附属図書館に移動することが

できた。これはハーン研究についての貴重資料であり、今後整理・分類し、やがて公開して活用できるようにしたい。

次に松江市の文化課・観光課のスタッフ3人が2010年10月松江市において行われるハーン・イベントの準備のために熊本を訪ねられたとき、これに対応し、相互の情報交換と協力体制の強化の約束を確認した。また2009年11月の熊本大学設立60周年記念のハーン・イベントに際しては焼津の八雲会副会長が参加され、今後の情報交換などの確認を新たにした。また熊本アイランド協会の市民講座、熊本八雲会の読書会などの講座については小泉八雲熊本旧居や五高記念館などで本推進室のメンバーも講師となり、応分の協力をすることができた。

小泉八雲熊本旧居保存会の機関誌『ハーン通信』、熊本アイランド協会機関誌『熊本アイランド協会』、熊本八雲会の機関誌『石仏』などそれぞれへの執筆貢献も本推進室ハーン部門のスタッフが行ってきていることもここに記しておきたい。学内カリキュラムとの関係では大学教育センターで行っている学際科目「五高と近代日本」の講義担当者として本推進室ハーン部門の構成員が分担協力して講義に参加している。

この10年間、規模や内容こそ違え、この研究推進室はハーンの持続的な学術出版、論文発表、研究報告、展示会、講演会などを通してハーンの顕彰と研究成果の発表を継続して行ってきた。このことが熊本という地域のみならず全国的な視点でハーンの顕彰と研究において本推進室ハーン部門の果たしてきた役割の小さくないことを示してくれている。

平成22年（2010）はハーン来日120年、生誕160年という節目の年を迎える。来るハーンの命日（9月26日）には全国的な視野をもって本学附属図書館及び本推進室主催でハーン顕彰と研究成果の公表を趣とした記念の基調講演とシンポジウムの開催を予定している。